

(福岡県)

悠久の歴史を共働でつなぐ 愛郷とにぎわいのまちづくり

建造1350年の
水城と大野城・基肄城

平成27年12月5日、福岡県大野城市の多目的施設（大野城まどかぴあ大ホール）において、「水城・大野城・基肄城1350年記念式典」と題するイベントが盛大に開催された。同イベントは7世紀（飛鳥時代、西暦665年ごろ）に国土防衛および大宰府の防衛ラインとして築かれたとされる「水城・大野城・基肄城」の築造1350年を記念して、平成24年度から関連自治体により随時実施されてきた、一連の記念事業の締めくくりとして開催されたものだ。

記念事業の掉尾を飾るイベントにふさわしく、水城・大野城・基肄城が立地するすべての関連自治体（3城跡が立地する大野城市、大宰府市、筑紫野市、春日市、宇美町、基山町の4市2町および福岡県、佐賀県）による

共同開催となった。

式典では記念講演2本（文化庁主任調査官・佐藤正知氏、福岡大学名誉教授・小田富士雄氏）に特別講演（歴史漫画の里中満智子氏）も行われたほか、大野城市・基山町の小中学生が創作劇「こころをつないで」や学習発表「自慢のふるさと」、合唱「私のふるさと」などを披露。華やかな雰囲気の中にも里中満智子氏の講演タイトルの通り、まさに「先人の心を次代へつなぐ」のにふさわしい、質量ともに充実したイベントになった。

立地自治体がこれだけ多岐に亘っているのを見ても分かるように、1350年も前に隣接して築かれた、土塁と濠を中心とする自然の地形を巧みに組み合わせた水城・大野城・基肄城の規模は、非常に広大だ。

同時にこれらの古代山城群が構築する広大な国土防衛ラインをもつて守られようとした、当時の大宰府が大和朝廷に果たしていた役割の重要性も、おのずと分かってくるという

ものだろう。

「大陸との交易や政治的外交を担う日本側の玄関口であった九州・大宰府に緊急防衛の必要性が生まれたのは、朝鮮半島の白村江を舞台に勃発した『白村江の戦い』（663年）の際に、大和朝廷（倭国）が百済に援軍を送り、唐・新羅連合軍に挑んで敗れたことに端を発しているんですね。大和朝廷はその後の唐・新羅連合軍による海を越えた九州・大宰府への侵攻を恐れ、防衛ラインとして水城・大野城・基肄城を



井本宗司
大野城市長



中央の山が大野城跡(四王寺山)、手前に延びる土塁が水城

築いたといわれています」

そう語るのは井本宗司・大野城市長だ。

水城・大野城・基肄城はそれぞれ国指定特別史跡であるが、大野城市の市名が大野城跡から採られているのを見ても分かるように、水城跡とともに大野城跡が市内にある（基肄城は市域外）。さらに市域には国指定史跡の牛頸須恵器窯跡（6世紀から9世紀にかけて機能した須恵器の窯跡）があるなど、大野城市は京都奈良などの古都を除けば、全国的にも珍しい「3つの国指定史跡」しかも2つは



大野城(四王寺山)山頂付近に残る門の跡と土塁、建物の礎石

特別史跡」を持つ都市としても知られる。

近年の歴史ブームに付随して取り上げられる話題はどうしても、戦国時代や江戸時代など、文書資料や具体的な関連史跡の多い華やかな時代に集中しがちだ。それに比較すれば、文書資料も明確な史跡も少ない大和朝廷時代初期の歴史への関心は、一般的にはなかなか広がりにくい側面を持っているといえる。

そんな中であって、水城・大野城・基肄城の史跡群が巨大な「現物」としての魅力にあふれていることは、実際に現地を訪ねてみるとよく分かる。探索ルートの再構築や、見せ方の工夫、時代背景の適切な解説などがなされるとともに、旅への誘いを巧みに行えば、文

書資料的に未知な部分の多いことがかえってロマン(想像力)の源泉となり、かつての邪馬台国ブームのような関心をもたらしやす可能性も決して低くないものと思われる。

また九州・中国・四国地方には、これまでスポットの当たりにくかった、31の自治体に立地する古代山城の跡が計22カ所確認されており、年に1回の「古代山城サミット」も持ち回りで開催されている(平成22年の第1回サミットは大野城市開催)。サミット参加自治体による連携の展開次第では、広範囲にわたる、古代史ロマンに満ちた旅の広域新ルートの構築も可能だろう。「水城・大野城・基肄城1350年記念式典」が見せた盛り上がりだが、そうしたムーブメントの序



盛大に開催された「水城・大野城・基肄城1350年記念式典」

市の新たなランドマークになることだろう。

「これらの事業は市民の皆さんや観光で訪れてくださる方々に、大野城市を歴史的、文化的、地理的に、丸ごと立体的に理解していただくための事業だといえます。初めて訪れてくださる観光客の方々に大野城市の概要を知っていただくことはもちろんですが、実は大野城市の市民の皆さんにも、ふるさと大野城市の概要を改めて理解していただくことが重要だと考えています」(井本市長)

章となったとしても、決しておかしくないだけのスケールの大きさがある。

歴史をつなぎ市民をつなぐ 愛郷心の醸成

大野城市で現在進められている水城・大野城・基肄城築造1350年の関連事業、「(仮称)歴史をつなぎ路」整備計画(平成28年度完成予定)、「大野城トレイル」整備計画(平成27(29)年度に順次着手予定)、「(仮称)大野城心のふるさと館」整備計画(平成30年度完成予定)は、まさに来るべきムーブメントの準備ともなり得る意欲に満ちた事業だ。

まず「(仮称)歴史をつなぎ路」は大野城跡を市民にとってより身近な存在にするために計

画されたもので、歴史・自然・健康をテーマに、大野城総合公園からスタートする四王寺山(大野城跡がある山の名称)の登山道を整備する事業だ。

また「大野城トレイル」は大野城市の有する豊かな歴史・自然・景観・文化財・街並みなどを網羅的につなぐ散策路の整備計画で、市内全域の地域資源を結ぶ7つのルートが設定されている。

「(仮称)大野城心のふるさと館」は、大野城の歴史を概観する展示室や多目的交流機能を備えた施設で、「(仮称)歴史をつなぎ路」や「大野城トレイル」が設定する各散策コースの拠点ともなる。敷地は大野城市役所南側の隣接地にあり、地上3階建て、延べ床面積3262㎡の規模を誇り、完成すれば大野城

平成24年に市制40周年を迎えた大野城市に改めて「(仮称)大野城心のふるさと館」という交流展示施設の建設が計画され、「市民にふるさと大野城市を改めて理解していただきたい」と井本市長が考える背景には、悠久の歴史を市内外に多角的に発信するという主要目的のほか、市制施行以来の大野城市が辿ってきた歴史的な背景もあるという。

例えば市制施行時の大野城市の人口は3万7000人弱だったが、現在では10万人弱と約2.7倍に急増している。これに伴い、一般会計予算は市制施行当時の約13億円から現在は330億円前後と約25倍に膨らんでいる。基盤整備では土地区画整理事業の総面積が市街化区域の40%近くに及び、下水道普及率も0%から99.9%へと飛躍



四王寺山(大野城跡)に「大」の文字が浮かび上がる「おおの山城大文字まつり」は市内最大のイベント

的に伸びた(以上、大野城市市制施行40周年記念市勢要覧より)。

県都・福岡市の都心部から南へ約10kmの至近距離にあり、面積約26km²のコンパクトで緑の多い市域には、JR(鹿児島本線)と西鉄(天神大牟田線)が並行して市域を横断し、九州自動車道に連結する福岡都市高速道路のICが近接して、博多地区や福岡空港とも直結する大野城市は、北部九州でも有数のベッドタウン好適地として人気が高い。

現在の人口の主力を成す働き盛り世代の多くが、市制施行後に大野城市に引っ越してきた世代か、その第2・第3世代なのだ。そうした環境の中で都市的な集積が急激



登り窯様式の梅頭窯跡(国指定史跡牛頭須恵器窯跡の一部)

に進んできた大野城市にとって、市民の一体化や愛郷心の醸成は、市制施行当時から重要課題だった。

「協働」から「共働」へ、まちづくりの確かな進化

実は大野城市は市制施行(昭和47年)以前の昭和40年代前半(旧大野町時代)から、新興ベッドタウンとして人口急増現象が始まっていた。そのため当時から新たなコミュニティ形成のための、市民協働による施策がさまざまに実施されており、旧大野町時代の昭和46年の段階で既に南地区が、旧自治省から「モ



わくわくパビリオンの人気イベント・三輪車3時間耐久レース



福祉も含めた公共ワンストップサービス「総合窓口・まどかフロア」

デル・コミュニティ」に指定されるほど各方面から注目を集めてもいた。

大野城市では現在、市民協働の推進拠点として4つの体育館機能付きコミュニティセンター(南・中央・東・北地区に設置。以下「コミセン」と表記)を設置しているが、各コミセンにはコミュニティ運営委員会、パートナーシップ活動支援センター(コミセン、学校開放施設、近隣公園の管理運営・貸出事業などを実施)、地域行政センターなどの組織が集約されている。コミセンに体育館機能を必ず設けているのは、昭和40年代からのコミュニティ形成活動を通じて得た、「スポーツを一緒にすることが、見知らぬ顔の少なくない地域が一つになる最善の方法」(井本市長)との経験値に基づいている。

「スポーツによるコミュニティづくりはやがて生涯学習など各種の市民参画事業の隆盛につながります。また、現在では、コミュニティ協議会によるパートナーシップのまちづくりなどの都市内分権が主流の新しいコミュニティの形へと、発展しつつあります」(井本市長)

大野城市ではこうした流れを受けて、「協働」を「共働」と表現し直し、新たなコミュニティ形成を各方面から推進しようとしている。その流れの中で、今回、「ふるさとの歴史」の初期を彩る大野城築造1350年記念事業が開催され、市民共働で策定された前述の各種関連事業の推進計画が実施されよ



大野城まどかびあ(多目的ホール)

うとしている。「協働から共働」へと進化してきた、市民が主役のコミュニティづくりの伝統を持つ大野城市において、愛郷心の醸成と新たなにぎわいづくりを図る重要な機会となるに違いない。

大野城市における新たなまちづくりへの胎動は、交通インフラの大改革という形でも訪れようとしている。大野城市および沿線自治体にとって悲願ともいえる、西鉄天神大牟田線の連続立体交差事業が、着々と進みつつあるのだ(平成33年度事業完了予定)。

「西鉄の連続立体交差事業が完成すると、今度は高架下をどう活用するか、沿線地域の環境改善はどうするか、道路交通の円滑化を



多くの市民が参加した水城ウォーキング(水城の見学会)

より効果的にするための交通連結機能の強化をどうするかなど、事業完成後の新たなまちづくりがまた始まってきます。その計画については、大まかなプロジェクトの素案は出来上がっていますが、今後は魅力ある駅前地区のまちづくりなどの詳細を、市民参加による各種まちづくり研究会やワークショップなどの開催を通して、多角的に検討していきたいと考えています」(井本市長)

取材の折りにも随所でその模様が見られたが、鉄道の高架化(連続立体交差)事業の工事現場はいつ見てもダイナミックで心躍る。

同事業が完成すれば、これまでご紹介してきた「(仮称)歴史をつなぐ路」整備事業や「大



新住民の多い大野城市の一体化事業の一つ「MADOKAれくスポ祭」の一コマ



まちづくり活動の一環として行われている高齢者支援事業の一コマ

野城トレイル」整備事業の結果などにもさらに新たな光が当たり、より幅広い活用への道が開けることだろう。

築造1400年に向けた にぎわいつくり

冒頭にご紹介した「水城・大野城・基肆城1350年記念式典」が開催された翌日(平成27年12月6日)は、大野城市商工会が平成24年から毎年、秋の恒例イベントとして2カ月以上にわたって実施している「第4回おおのじょう まちなか わくわくパビリオン」(以下、わくわくパビリオン)の最終日だった。

わくわくパビリオンは大野城市商工会が主催する「にぎわいつくり」事業だが、たまたま大野城築造1350年記念事業と同じ平成24年からスタートしたため、この4年間は1350年記念事業と連携した事業(水城ウォーキング、大野城Ⅱ四王寺山登山会など)も行ってきた。

そして開催期間中は毎年20種以上の集客イベントが行われ、そのほとんどのイベントは市民のアイデアで決定されてきた。平成28年以降は実施形態が変更されるとの話だが、開催期間が2カ月にも及ぶにぎわいつくりイベントが、市民や民間が中心になって恒例化されているという事実には驚くしかない。この

一事だけでも、大野城市が目指すさらなる愛郷心の醸成への芽は、市民や民間の間で既に始めているといえるだろう。

またこうした動きに呼応するかのようには、大野城市では平成27年8月に「ふるさと大野城《まちの活力》創出計画」を策定。同10月には「大野城市にぎわいつくり協議会設立準備委員会」を設立、平成28年7月には「大野城市にぎわいつくり協議会」(いづれも仮称)を正式に発足する予定だという。

「この協議会の設立目的は、近い将来のさらなる少子高齢化時代の到来を見据えて、ふるさと大野城市のにぎわいを新たにつくりだし、まちの活力につなげていく方策を、さまざまに具体化していくことにあります」(井本市長)

同協議会の活動開始時期は、既にご紹介した大野城築造1350年の各種関連事業の始動時期とも重なる。またその少し先にはやはり前述した西鉄の連続立体交差事業の完成が控えている。

昭和40年代前半から右肩上がり人口を増やし続け、都市としての基礎体力を着々と蓄積してきた大野城市の近未来の目標の一つは、「大野城築造1400年」までさらに地道に発展を続け、市民の愛郷心のさらなる醸成とともに、にぎわいを少しずつでも増していくことにあると井本市長は語る。その準備は既に整いつつあるといえるだろう。

(取材・文 遠藤 隆 / 取材日 平成27年10月30日)